

「社会的望ましさ」をめぐるコミュニケーションとしての PC

——メディアでの差別語是正、反ヘイトスピーチをめぐる動きをとらえ直す——

日本映画大学 韓東賢（ハン・トンヒョン）

1 目的

主に 1990 年代以降のアメリカで、アンチによるレッテル貼りとして使われるようになった「ポリティカル・コレクトネス（PC）」という概念は、日本でも 2000 年代以降、とくにバックラッシュ的な動きとともに広がりを見せている。それを象徴するのが「ポリコレ叩き」といった造語だが、現在の日本社会にアメリカで「行きすぎた PC」とレッテルを張られたような——報告者の専門であるエスニック・マイノリティの問題に限ってみても、たとえばエスニックな多様性を称揚するような——価値観の広がりには存在しているのだろうか。

本報告ではこのような問題意識のもと、日本で PC という言葉が使われている文脈を整理し、定義したうえで、いくつかの事例を改めて PC としてとらえ直すことで、日本における課題を考える。

2 方法

対象としては、1980～90 年代に社会的な関心を呼んだ差別表現・差別語の是正問題と、2010 年代に入って台頭し大きな社会問題となった排外主義団体の街宣活動に対する反対運動と立法化への動きを扱う。被差別部落や在日コリアンらの当事者からマジョリティの市民へと拡大していった差別表現・差別語の是正を求める動きは、80～90 年代に起きた 2 つの大きな事件を機にメディアの自主規制をもたらすとともに「言葉狩り」という反発も生んだ。2010 年前後から台頭した排外主義団体によるヘイトスピーチをとまなう「街宣活動」への対抗運動やそれを憂慮する世論の高まりは、ヘイトスピーチ規制の立法化への動きに結実したが、それはつねに「表現の自由」との葛藤として語られた。本報告では、PC という視角からこれらの経緯を振り返る。

3 結果

PC は表現に対する評価の問題であり、その評価は「社会的な属性の価値づけの望ましさ」をめぐるものである。またそこには、ポジティブ（付加価値）ベクトルの「望ましい表現の奨励」から、ネガティブ（努力義務）ベクトルの「望ましくない表現の抑制」までのグラデーションがある。さらに PC は明文化されていない規範・倫理であり、その表出形態は評価する主体の公共性によって異なる。

このような図式化を踏まえ、差別語・差別表現是正問題について検討した結果、差別語・差別表現を公的な場で使ってはいけないというレベルでの「PC 的なもの」が一定のコンセンサスとなったことが確認できた一方、矮小化された構図によってバックラッシュへの道筋を用意するものになってしまった側面も否めなかった。また反ヘイトスピーチおよび立法化をめぐる動きからは、多文化主義的な進展をもたらすための前提となる、マイノリティの自由の侵害につながる差別と不平等の問題だという認識をもたらしたことが確認できた一方で、PC の外で PC を支える土台となる法規制の不在、もしくは弱い弱さを改めて照らし出した。

4 結論

以上の結果から、「社会的望ましさ」をめぐるコミュニケーションとしての PC が日本において豊かな実りをもたらすための課題として示唆されるのは、ネガティブ（努力義務）ベクトルの「望ましくない表現の抑制」としての PC を支えるしっかりとした差別禁止の法制度の確立とともに、矮小化やバックラッシュに対応するためにも、ポジティブ（付加価値）ベクトルの「望ましい表現の奨励」としての PC、およびそうした表現の洗練に向けたさらなる模索の必要性なのではないだろうか。